

映画「杜人」上映と監督トーク



ある人は「地球の医者」と呼び、ある人は「ナウシカのよう」と言う。

人間よりも自然に従う風変わりな造園家に3年間密着。

全国で頻発する豪雨災害は本当に「天災」なのか？

風のように草を刈り、イノシシのように大地を掘って
環境問題の根幹に風穴をあける奇跡のドキュメンタリー



前田せつ子監督

日時 10月28日(土) 上映2回

① 10:00～12:00 ② 13:00～16:00

②は上映後前田せつ子監督トーク

会場 練馬区立男女共同参画センターえーる (西武線石神井公園駅徒歩6分)

参加費 500円 / 映画冊子付 1000円

- 企画 女性会議練馬支部 申し込み・問合せ先 TEL/090-8564-8315

メール inufamily0722@gmail.com *保育あります



◇申し込みは（お名前・連絡先（電話・メール等）・参加①か②を書き

メール・QRコード・お電話で。定員：各回 45 名（先着順）

保育希望の方は、お子様のお名前・月齢・伝えておきたいこととお書き下さい。

（保育は1歳以上・未就学児対象、6名迄です）締め切り 10月25日（水）



東京都練馬区石神井町 8-1-10 電話 03-3996-9007

ナウシカのような環境再生医を追いかけたドキュメンタリー

ナウシカのような人に 出逢った～私がこの映画を撮った理由～

矢野智徳さんに初めて会ったときの衝撃を忘れません。「虫たちは葉っぱを食べて空気の通りをよくしてくれている」「草は根こそぎ刈ると反発していっそう暴れる」「大地も人間と同じように呼吸しているから、空気を通してやるのが大事」人間目線から遥か遠く、植物や虫、大地、生きとし生けるものの声を代弁するような言葉は、まるでナウシカのようなものでした。風のように枝を払い、穴を掘る様子はイノシシのよう。一日の作業を終えたとき、その場にはスッと息が整うような、なんとも言えない清涼感が漂っていました。こんなふうに自然と関わればどれほど豊かに生きられるだろう、いや、人間であることの罪悪感が少しは軽くなるかもしれないと思いました。

それから4年。技術も、知識も、経験も、プロ用のカメラもない中で、2018年5月、矢野さんの本拠地である山梨県上野原市を訪れました。想い一つからスタートした撮影の旅は、屋久島、福島、安曇野、気仙沼へと続いていきました。2018年7月、気仙沼での撮影中に、西日本一帯を記録的な豪雨が襲いました。初めて会ったとき、矢野さんが警告していたことが起こったのです。被災地支援を申し出た矢野さんたちを追いかけて、岡山県倉敷市真備町、広島県呉市に向かいました。そこで見たのは、コンクリートの砂防堤や道路、U字側溝を突き破って流れ下った土砂や流木と、大切なものを失いながらも必死で立ち上がろうとしている人々の姿でした。「土砂崩れは 大地の深呼吸なんです。息を塞がれるから、それを取り戻そうとしている」

2019年5月には屋久島豪雨で巨岩が崩落、10月には台風19号で全国21もの河川が氾濫。被災地に駆けつけた矢野さんは、これらが単なる天災ではなく、人の開発がもたらしたことであること、自然が人に求めていることを伝えていきます。泥だらけになって土を掘り、汗だくで草を刈り、一日作業をした最後に「楽しかった」と満面の笑顔を浮かべる人がたくさんいる。人間らしい充足感、幸福感というのは、かつての「結（ゆい）」……人と人、人と自然の共同作業があってはじめてもたらされるものではないだろうか。

「この場所を 傷めず 穢さず 大事に使わせてください」と、人が森の神に誓って 紐を張った場＝「杜（もり）」」。忘れ去られたこの言葉が、その記憶の小箱を開く鍵となることを願って。 監督 前田せつ子